

琉球大学学術リポジトリ

《研究総論》 学びに向かう力をはぐくむ(1年次)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属中学校 公開日: 2021-08-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島袋, 靖之, 里井, 洋一, 比嘉, 智也, 門口, 安光, 伊藤, 誠, 坂口, 卓也, 下門, 健吾, 前原, 大知, 上原, 明子, 田港, 朝也, 上江洲, 朝男, 江藤, 真生子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48825

学びに向かう力をはぐくむ(1年次)

島袋靖之* 里井洋一** 比嘉智也* 門口安光* 伊藤誠* 坂口卓也* 下門健吾*
前原大知* 上原明子* 田港朝也* 上江洲朝男** 江藤真生子**
*琉球大学教育学部附属中学校 **琉球大学教育学部

I 主題設定について

1 これまでの研究について

本校は前次研究で「21世紀型思考力の育成」に取り組んできた。研究1年次は、思考力をはぐくむための授業実践が試行され、研究2年次は、生徒が深く考えるための手立て(学ぶ意義を感じる文脈のある単元づくりや学び具合を実感できる振り返り活動の工夫)の充実を図った。研究3年次は、“生徒の学びのみとり”に主眼をおいた取り組みを行うとともに、学習苦手群に焦点を当てた。4年次は教師側の仕掛けや状況設定の工夫により学びの自覚化を促すことで、「深く考える」生徒の育成を目指す実践研究を行った。「21世紀型思考力の育成」という主題で研究を始めた当初は、「思考力」についての実践研究に取り組んでいたが、研究が進むにつれ、研究のキーワードが「思考力」から「学びの自覚化」へと変化してきた。これは、学びの自覚を促すことが「深く考える生徒」の育成につながるということがみえてきたからである¹⁾。「学びの自覚化」と「深く考える」との関係を捉える上で重要なキーワードとして「学習観」が出てきた。生徒の「学習観」を変えることが、学びの自覚化を促し、深く考える生徒をはぐくむことにつながるということがみえてきた。本校は「学習観」をよりよいものへと変えるために大切な考え方を示したリーフレットを作成し、「Ryufu's thinking」と名称をつけ、公立学校で活用してもらえるように発信していきたいと考えている(図1)。



図1 琉大附属中学校 Ryufu's thinking リーフレット

2 主題設定に向けて

前次研究4年目を終える2020年3月に、全職員でこれまでの研究を振り返った。その中で「課題を解決して実践を理論化する」という方針のもと、生徒の課題を洗い出した。これまでの生徒の学習する姿から「学習課題を提示されたらやる」「苦手意識があり考えようとしなない」「目的意識がない」「すぐ諦める」「評価のための勉強」「答えを待つ」などという課題が挙げられた。これらの課題は、中央教育審議会答申(平成28年12月)で整理された3つのうちの資質・能力の「学びに向かう力・人間性等」に関する課題とつながると読み取れる。よって、4月からは「学びに向かう力・人間性等」に焦点を当てて研究を進めていくこととなった。

2020年4月、これまで各教科で挙げた課題に対する取り組み(やりたいこと)を共有した。例えば、社会科では「単元を貫く問いを設定し、その問いは誰でも考えることができるフェジーな問いをつくりたい」、理科では「教科書には載っていない探究活動に取り組ませたい」ということが

紹介された。

このように、研究としてやりたいことがみえてきた一方で、研究の進め方については、模索している段階であった。そのような中、附属中学校・小学校の研究主任と附属小学校の共同研究者(琉球大学教授道田泰司)が小中連携の一環として研究について話し合う機会があった。そこで、道田は次のように述べた。

教育研究を行うにあたっては、「何のための研究か」を持っておくことが重要です。端的に言うと、それは次の3点に集約できます。「子どものための研究(学びの深まり)」「教師自身のための研究(問題解決)」「地域のための研究(教育力向上)」です。子どもたちの課題を常に見据えながら、その課題を解決することを目的に、研究をすることが重要だと思います。

道田の言葉から示唆を得て、「生徒の課題を解決することを通じた研究に取り組む」という考えのもと、改めて全職員で「学びに向かう力」に関する各教科の課題となる生徒の姿(学びに向かえていない姿)を共有した(表1)。その解決に向けて本主題を設定し、生徒の課題を解決することが「学びに向かう力をはぐくむ」ことにつながると考え研究を進めていく。

各教科から挙げられた課題は、沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ⁽²⁾で課題の一つとして挙げられている「自己肯定感の低さ」につながると考えられる。理科や英語で取り挙げた「評価を気にして正解を求めようとする」「間違いを恐れチャレンジしようとしなない」「他の意見に簡単に同意し、自分の考えを言わない(自分に自信がない)」などという姿は、自己肯定感の低さから、周りからの評価を過剰に気にする余り、自分自身の考えをもていないと推察した。そこで、本校では「学びに向かう力をはぐくむ」研究に全教科で取り組むことで、本校の生徒だけではなく、沖縄県公立学校の生徒の課題解決の一助にもなると考えている。

表1 各教科からみる学びに向かえていない姿

国語	<ul style="list-style-type: none"> ・将来の自分像と今の自分の学びをつなげられない ・評価のために課題に取り組む ・自らの学びの状態を認識できていない
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に活動しているが主体がない ・人の考えを写す
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・数学を学ぶ意義を見出せない ・何が分かって何が分からないのかを自覚していない
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・本当に分からないものを解き明かしたいという姿勢が弱い ・評価を気にして正解を求めようとする ・とりあえず探究過程にそって学習している
音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・馴染みのない音楽に対する意欲が低い ・馴染みのない音楽に対して、主体的になれない
美術	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の価値や学ぶ意義を見出せない ・自分の表現力を思い切って出せない
体育	<ul style="list-style-type: none"> ・運動が苦手な生徒が主体的に取り組めない ・「できる」「できない」や「勝敗」に過剰にこだわる
技術 家庭	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な課題を見つけ、よりよい生活にする為の改善策を立てることができない
英語	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的だが主体性がない ・間違いを恐れチャレンジしようとしなない ・他の意見に簡単に同意し、自分の考えを言わない(自分に自信がない)

Ⅱ 研究を進めるにあたって

本主題の「学びに向かう力をはぐくむ」という実践研究を進めるにあたって、懸念されることがある。それは、例えば目の前の生徒の姿を見取らずに、「学びに向かう授業モデル」を安易に取り入れ、生徒の実態に即さずにそれをやり続けてしまうことである。このような、モデルや概念を定義して研究を進める型のことを道田(2020)は「概念駆動型」⁽³⁾と呼んだ。「概念駆動型」に対置される「問題駆動型」の研究は、生徒の課題(学びに向かえていない姿)があれば、その姿がなぜ現れているのかを検討し、手立てを講じ、課題を解決していく研究である。本校では、生徒の課題に主眼をおいた「問題駆動型」の研究スタイルを取り入れた(図2)。

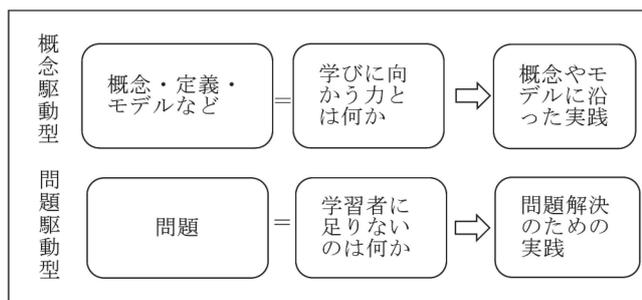


図2 概念駆動型と問題駆動型の実践構想モデル(道田 2020 を改変)

「問題駆動型」の研究が、生徒の課題からスタートするのであれば、生徒の姿をていねいに見取る必要がある。ていねいに見取ることによって、生徒への具体的な手立てを考えることができる。また、手立てを講じた後のみとりも必要で、見取った姿によって、手立ての有効性がみえてくる。有効性がないと判断すれば、うまくいかなかったことを次に生かして別の手立てを考えればよい。このような「失敗を次に生かす」という「Trial & Error」の精神は、本校でこれまで培ってきた考え方の一つでもある⁽⁴⁾。「Trial & Error」の精神のもと試行錯誤しながら、生徒の課題を解決するために全職員で取り組んでいく。

III 研究の年次計画

3年計画の研究1年次にあたる今年度を研究の模索期と位置づける(表2)。前次研究の流れを引き継ぎながら、各教科で手立てを試行錯誤して実践していく。4、5月の新型コロナウイルス感染症予防による休校措置で当初の年次計画通りにはいかなかったが、現時点では3年計画で取り組んでいく。

表2 年次別研究計画

段階	期間	主な実践内容
模索期	1年次	・課題のみとりの模索 ・手立ての模索 ・これまでの実践の省察
充実期	2年次	・課題のみとりの深まり ・手立ての充実 ・教科間のみとりの共有と充実
発展期	3年次	・課題のみとりの発展 ・手立ての深化 ・教科間のみとりの発展、深化

注)表2の年次計画は、新型コロナウイルス感染症拡大予防による休校措置のため、当初の年次計画を変更したものである。

IV 実践の様子

1 教科の実践

ここでは3つの実践を取り挙げる。

社会科では、「積極的に活動しているが主体がない」「人の考えを写す」などの課題が挙げられた。「(単元)振り返りシート」に「単元の問い」に対する「自分の考え」を記述し、その記述に対する評価(称賛)を生徒が相互に行う(フィードバック)実践を行っている。「自分の考え」が他者によって価値付けされ、考えが価値あるものとして自覚される。これにより「生徒が主体をもつ」きっかけづくりを行っている。

英語科では、「積極的だが主体性がない」という課題が挙げられたが、それを解決すべく「英語で学校紹介をする」というパフォーマンス課題を設定している。それにより、与えられた時間を過ぎてもなお、自分たちが発見した「学校の良さ」を英語で相手に伝えたいという思いを持って、試行錯誤する姿は学びに向かう姿といえる。

数学科では、「数学を学ぶ意義を見出せない」「何が分かって何が分からないのかを自覚していない」という課題が挙げられた。その課題解決としてMATHトークという取り組みを行っている。これは、「生徒一人一人に対しての個別インタビューや教科面談」という取り組みである。個別にインタビューすることで、学習内容の理解度や学習への取り組み状況について把握し、授業改善に生かしている。

各教科の詳細は、各教科論で後述する。

2 各教科の手立て

今年度、各教科で様々な手立てや実践を試行してきた。各教科の手立てをみていくと、大きく4つに整理される。それらを本校では、「振り返り系」「フィードバック系」「評価系」「主体性系」と分類した(表3)。「振り返り系」とは、生徒に振り返りの視点を与えるなど、自覚化を促すこと、「フィードバック系」とは、生徒の学習状況や理解度などを見取り、それを生徒へフィードバックすることで、生徒の学びを認め、励ますことである。「評価系」とは、ルーブリックを活用することで、生

徒自らが、目指す方向性を定め、主体的に学習に取り組めるようにすること、「主体性系」とは、学びを自分の生活に置き換え実践する工夫や、生徒自ら学習課題を設定することなどである。

本校では、これまで教科の壁を越えて、互いの実践を参考にしたり取り入れたりしながら研究を進めてきた。そこから、表3のように、学びに向かう力をはぐくむには、単一の決まった方法はなく、生徒の姿に応じて様々な手立てが必要だということがわかった。

加えて、それぞれの手立ては、相互に関連しながら、生徒の課題解決に迫っていくことができると考える(図3)。これらの様々な手立てを実践することによって、学びに向かう力をはぐくむことができると考えられる。

表3 各教科の手立ての分類表

手立ての分類	手立て・実践
振り返り系	<ul style="list-style-type: none"> OPPシートの活用(国語) 振り返りシートの活用(社会) 振り返りの視点を明確にする(音楽) 振り返りの充実(体育、数学)
フィードバック系	<ul style="list-style-type: none"> 教師のコメント(国語、理科) MATHトーク(数学) 生徒が表現した造形的な創意工夫の価値づけ(美術)
評価系	<ul style="list-style-type: none"> ルーブリックの活用(英語) ワークシート、作品、つぶやきなどのあらゆるみとりの工夫(美術)
主体性系	<ul style="list-style-type: none"> 単元のめあてを生徒主体で決める(体育) 得点板の排除(体育) 勝ち負けに執着させない(体育) 表現力が出しやすい、「上手い下手」で測れない題材づくり(美術) 自分の生活に置き換え実践する工夫(技術家庭) 臨場感のあるパフォーマンス課題の設定(英語) 生徒自ら設定する課題(理科) 教師の意図的な働きかけ(理科)

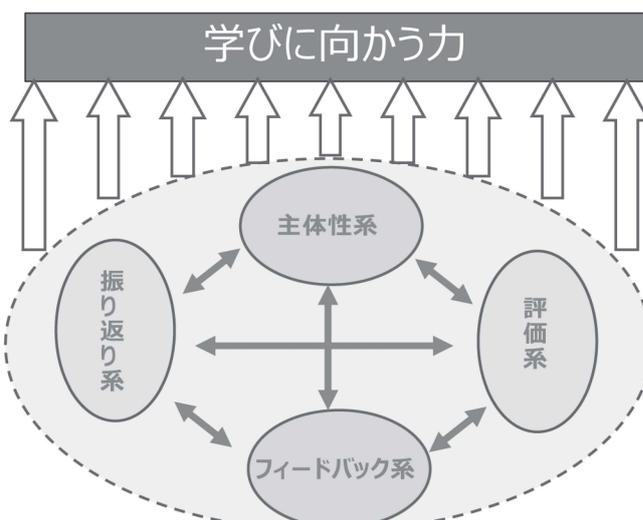


図3 各教科の手立ての分類

V 次年度への展望

表3に示したように、学びに向かう力をはぐくむための手立て・実践は様々である。次年度は、各教科のみとり(生徒の姿)をもとに、その共通点や相違点などを整理しながら、教科の専門性を生かしたよりよい手立てへと工夫・改善していく。加えて、新たな手立てについても模索し研究を進めていきたい。

引用・参考文献

- (1)琉球大学教育学部附属中学校『研究紀要』第32集、2019年、p6
- (2)沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ～学びの質を高める授業改善・学校改善～、沖縄県教育委員会
(<https://www.pref.okinawa.jp/edu/gimu/ujutsu/shisaku/documents/project2.pdf>)2021.2.25 取得
- (3)道田泰司「批判的思考力育成教育を構想するために」2020年
- (4)前掲(1) p10